

本研究の背景

申請者が主宰する音楽教室では、数年前から音楽制作コースを開講し、GarageBand、Logic Pro などを使用した作曲や編曲等のレッスンを行ってきた。初めから DTM をやりたい生徒もいるが、ピアノコースから音楽制作コースに転向した生徒も多い。彼ら(転向時、小学校高学年)はピアノの練習が進まず壁にぶつかっていたのだが、DTM が救世主となり、そのうちの 1 人は、新聞社の取材を受けるほど熱心に取り組んでいる(日経 MJ 2021 年 6 月 9 日)。また、2021~2022 年の年末年始を活用して、ピアノコースで学ぶ小学校 1 年生を対象に、GarageBand による作曲ワークショップを行ったところ、DTM を体験することによって、音楽の構成やコードネームに対する理解が深まり、保護者からも非常に好評であった(大東文化大学紀要第 61 号 2023 年 2 月発刊)。加えて、コロナ禍が契機となり、GIGA スクール構想、児童生徒 1 人 1 台端末が普及し、無償で使用できる作曲用 Web アプリなどが次々登場しており、子どもたちの情報リテラシーも飛躍的に向上しているという社会的背景も追い風となっている。

本研究の目的

このような状況を踏まえ、本研究では、ピアノコースの生徒が DTM に取り組み、自身のピアノ演奏とコラボする「ピアノ演奏×DTM」の表現活動を行う。そして、その成果を発表会として示したいと思い、本助成に応募することにした。ピアノ教育における工夫といえば、教材面での工夫、指導法の工夫、連弾あるいは他の楽器とのアンサンブル方法の工夫などが主なものであるが、本研究によって、上述した公教育の変化やデバイスの普及、子どもたちの情報リテラシーの向上などに呼応したハイブリッドなピアノ教育の一方法を提示できると考えている。GarageBand などをレッスンで活用しているピアノ教師も少ないことから、広く受け入れられる試みである可能性も高い。(既存音源に合わせてドラムを叩いていたドラム学習者にも、自身から制作した DTM に合わせて演奏するといったことに挑戦する予定である。)